

2025年11月30日 礼拝説教要旨
 ヨハネによる福音書講解説教62「心動かされる主」
 出エジプト20:4~5、ヨハネ11:28~37

神さまは単にわたしたちの願いを叶える都合の良い神さまではありません。その願いをはるかに超える救いを行われます。それが罪と死からの救いであり、神さまの御国を生きる永遠の命です。それはアダムとエバ以来人類が抱えて来た罪の問題を解決することであり、人類にとって最も根源的な救いです。しかし、わたしたちはそれよりも、身近で現実的な幸せだったり、目に見える形での救いを求めています。健康や経済の問題など、わたしたちが生きて行く中ではそういう問題は尽きません。でもそれはその時だけのことであって、根本的な人間の救いにはつながりません。いくら表面的に問題が解消されたとしても、その下では罪と死の問題がくすぶっていて、それが再燃されます。わたしたちの人生はその繰り返しではないでしょうか。

イエスさまはわたしたちをその根源的な救いへと導いてくださいます。「先生がいらして、あなたをお呼びです」(28節) イエスさまがマリアを呼んでいます。これはその救いへの招きと理解してよいでしょう。それまでマリアもまた単にラザロの病気の回復だけを願っていました。そのマリアをイエスさまはお呼びになられ、このラザロのよみがえりの証人になさろうとしています。マリアはすぐイエスさまのもとに行きました。注目したいのは32節に「ひれ伏し」(ピクトオ) とあります。この言葉は神さまを礼拝するという意味で用いられる言葉でもあります。イエスさまに呼ばれた者がその足もとにひれ伏して礼拝する。これはわたしたちの姿と重なります。わたしたちもまたイエスさまに呼ばれ、このように神さまを礼拝しているのです。この「ひれ伏す」「礼拝する」という意味の言葉にもう一つプロスクネオーという言葉があります。こちらの方が礼拝する、拝むという意味では一般的ですが、今日のところでマリアがひれ伏したという言葉、ピクトオは、むしろ「倒れこむ」「落ちる」という意味でもあります。自分を投げ打つというようなイメージでしょうか。これは完全に自分を明け渡す、一茶合切を神さまの前に投げ打って、御前にひれ伏すということです。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ11:28) とイエスさまが言われたことを思い起こします。

礼拝は、もちろん神さまを拝むのですが、同時に、この自分が神さまの御前に倒れ込むようにして、すべての重荷を下ろすところでもあります。わたしたちは多くのものを抱えながら生きておりまます。破れを抱えている、弱さを抱えています。それは一週間の生活を振り返っただけでも幾つも数えることができるでしょう。それを全部ここに投げ打ち、注ぎ出していい。自分はあれもできます、これもできます。こんなにも頑張ってきましたと自信たっぷり胸を張って礼拝するのではない。むしろフラフラになりながら、やっとここにたどり着いて、御前に倒れ込むようにして、自分の弱さ、不甲斐なさを全部注ぎ出す。礼拝は、何よりそういう場所であることを心に留めたいのです。

イエスさまは、わたしたちの弱さもすべてご存知です。だから隠しても、見栄を張って仕方ありません。すべてを御前にさらけ出し、ありのままで礼拝をすることを求めておられる。そしてそうであってよいことをご自身が身をもってここに示されているように思います。今日の御言葉でひときわ心に留まるのはイエスさまの感情です。「心に憤りを覚え、興奮して」(33節) そして「イエスは涙を流された」(35節) ここまでイエスさまが感情を露わにされると

いうのは非常に興味深いところです。ある意味イエスさまが心搖さぶられ、取り乱しておられる。「憤りを覚え」とあります。この言葉は「馬が鼻を鳴らす」という意味で、馬のいななき、鼻息の荒さから怒りの感情を表す言葉になりました。イエスさまは何に対してもこのような怒りを持たれているのでしょうか。

それはこの愛する家族を引き裂いた死の事実、そしてその死をもたらす罪の支配に対する怒りと理解してよいでしょう。またこの罪と死の支配に成す術もなく、諦め、ただ泣き叫ぶしかない人間の現実を知つて深く悲しまれたということではないでしょうか。人間をそのような目に合わせている罪に対する怒り、そして悲しみが入り混ざった感情がここにあります。特に「イエスは涙を流された」(35節)という部分は、聖書の中で一番短い聖句として有名です。この短い一言にどこまでもわたしたちの弱さに寄り添われる神さまの恵みを感じ取ることができます。ヘブライ人への手紙に「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかつたが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」(4:15)とあります。わたしたちのあらゆる感情をイエスさまご自身が深く受け止めておられる。それは救いではないでしょうか。

今日からアドヴェントが始まります。クリスマスに向けて備えていきますが、何よりもまことの神さまがわたしたちのあらゆる罪の悲惨を担い、まことの人間として生まれてきてくださつたことを心に留めなければなりません。イエスさまはわたしたちと同じように憤り、悲しみ、涙を流されます。それはやがて十字架の死に至るほど徹底されました。そこに神さまの深い同情があります。かつてこの教会の牧師であった松木治三郎先生が、このところの説教である婦人のことを書いておりました。「ひとりの婦人が、自分の子のことであるが、ある時、泣けて泣けてどうしようもない深い悲しみと、押さえようのない激しい怒りとが一つになって、わたしの胸の中はもえる火のようであった、自分に対してか、子に対してか、それとも罪に対してか…」イエスさまはそういうわたしたちの入り混じった複雑な感情をも担われました。人間の感情は複雑です。けれどもそれをすべてご自身が担われ、まことの人としてわたしたちに深く寄り添われ、泣く人と共に泣いてくださつたのです(ローマ12:15)。

天の父よ。わたしたちを罪と死の支配から解き放つために、あなたご自身がわたしたちと共にいてください、すべての感情をもご自身のものとしてくださることを感謝します。だからこそ、わたしたちはどんなに取り乱していたとしても、あなたの御前に飾ることなく、進み出することができます。その恵みに応えて今週も歩ませてください。主の御名によって祈ります。アーメン。